

各種行事への参加報告書

報告者氏名	越智富夫	他参加者		
内容	<input type="checkbox"/> 会議 <input checked="" type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> イベント <input type="checkbox"/> その他 ()			
	※会議の場合は、 拘束時間数	時間	※会議等の開催場所までの 出向に要した時間数(往復)	時間
開催日時	平成29年12月10日(日) 10時～15時			
名称	(公社)全日本鍼灸学会中国四国支部認定講習会			
主催	(公社)全日本鍼灸学会中国四国支部			
(あれば) 講師 (所属)	戸村多郎先生(関西医療大学 准教授)			
<p>1. 感想 (印象深かったこと) 150字以上</p> <p>鍼灸治療(東洋医学理論に基づく治療)の効果をどのように評価するのか。このことは鍼灸業界の最も重要な、そして最も難しい問題でした。</p> <p>私は以前から質的データを数的なデータとしてどのように表すことができるのか。これができるればそれなりのエビデンスが示せるのではないかと考えていました。また、この方法でしか正しく評価できないとも考えていました。そして、もう一つの大きなキーポイントはエンドポイントです。どの時点をもって評価するのかこれも大変重要なものとなります。</p> <p>今回の戸村先生の五臓スコアは五臓の代表的な症状をそれぞれ3つにまとめそれらのスコアからどの臓が不調なのかを示そうとしたものでした。まさに私がこれまで考えてきた手法であり、それらの内容はきちんとしたエビデンスが示されており、たいへん素晴らしいものでした。</p> <p>しかし、その脾と肺の項目は蔵象学で示される理論とは異なるものとなっています。“Spleen、7 疲れがとれない・8 疲れて横になる・9 体が重い。Lung、10 腹が鳴る・11 腹が空いて仕方ない・12 鼻水が出る”となっています。</p> <p>このように特に脾と肺の項目は一般的な東洋医学理論とは異なるものとなっています。</p> <p>また、身体全体に現れた症状から診断してこうとする東洋医学には、もう少し多くの項目から診ていくことが必要なのではないかと感じました。</p> <p>とはいえ、私にとっては大変興味深い内容であり、これまでの EBM 中心の医療から、語りに基づく医療(nbm)を重視するという、質的データから評価するという東洋医学が本来重視すべきところから評価していこうということで、これまでとは違った大変貴重な研修会でした。</p>				
<p>2. 全国大会に対するご意見・ご要望などありましたらお書きください。</p>				
<p>3. 愛媛県鍼灸師会の学術研修会についてのアンケート</p> <p>①今後取り上げてほしいテーマなどありましたらお書きください。</p> <p>②招聘したい講師などありましたら具体的にお書きください。</p>				

※画像データなどあれば理事メール等にて送ってください。HP などでの報告資料として使わせていただきます。